

「瑞巖寺の七堂伽藍は金で装飾されていた」と、俳句の松尾芭蕉（1644-1694）は1689年に瑞巖寺を訪れ、紀行文と詩集「奥の細道」の中で述べている。

円仁(793/794-864)が松島に密教であった天台宗の拠点を設定した9世紀以来、ここに寺院がある。400年後、禅宗の臨済宗（当時は新仏教であった）が、ここに寺院を建設し、徐々に宗派は取って代われ吸収された。瑞巖寺は今も臨済宗の寺院である。

現在の寺院の複合施設は、江戸時代（1603-1868）、日本の北部の大部分を統治していた有力な藩主である伊達政宗（1567-1636）によって1604年に造営命令が出された。主な仏閣は5年の歳月をかけて完成した。政宗の瑞巖寺は伊達家の菩提寺となり、他の禅寺に共通する特徴を取り入れているが、宗派の審美的な質素さには欠けている。その豪華な装飾—和歌山県から船で運ばれた建築資材、精巧に彫刻された欄間、金箔の上に描かれた色鮮やかな襖絵は、芭蕉によって奥の細道に記されており、安土桃山時代(1568-1600)の典型的なものである。16世紀末の最後の数十年、時代は100年以上の内戦の終焉を迎え、大きな社会変革が起きていた。この間に芸術は繁栄し、最初のヨーロッパ人が日本を訪れた。

瑞巖寺の本堂と台所にあたる建物（庫裏）は国宝に指定されている。

本堂へと続く広い道には杉の木が並んでいるが、2011年の東北地方太平洋沖地震では、海水で被害を受けた多くの木を、伐採しなければならなかった。瑞巖寺は伝統的な耐震構造と松島湾の島々によって守られたおかげで、震災の他の被害からは免れていた。

本堂へと続くもう一つの参道には海によって浸食された古代の洞窟群がいたるところで見られ、何世代にもわたり訪問者によってさらに拡大されてきた。これらの洞窟群は、寺院の建設前から仏教の儀式に使用されていた。故人を供養するため、今日、ここに訪問者は彫像を置いたり戒名を刻んだりしている。